

「サマセット伯への祝婚歌」* におけるダンの宮廷観

久 野 幸 子

I 序 論

1613年12月26日、ジェームズ一世の宮廷で、当時王の寵愛を一身に集めていたサマセット伯 (Earl of Somerset, Robert Ker or Carr, ?—1645) の結婚式が華々しく挙行された。これを祝って、詩人や劇作者が競って祝婚歌や祝詞、祝婚仮面劇を献ずる中で、¹ 約一年前から伯の庇護を得ていたジョン・ダン (John Donne, 1572—1631) も、235行からなる「サマセット伯への祝婚歌」(“Epithalamion at the Marriage of the Earl of Somerset”) を献呈している。

さて、当時の人間らしく、ダンはその生涯の殆どどの時点にあっても、〈絶対君主制〉を最良の政治形態と考え、〈宮廷〉の存在を肯定している。² しかしながら、現実の宮廷や宮廷人に対しては、青年期には——エリザベス女王の国璽尚書を勤めたエジャトン卿の秘書職にあった時でさえ——「腐敗し、墮落している」とかなり批判的であり、³ 1602年以後、秘密結婚が原因で、宮廷社会を追われ、傍観者の立場にあった数年間も、彼の宮廷や宮廷人に対するこのような態度は変わっていない。⁴

では、この祝婚歌を執筆した頃、つまり、宮廷登用を切望していながら、約一年後にはそれを断念し、聖職叙任の時を迎えることになるこの中年期の終り頃、ダンは宮廷や宮廷人をどのように考えていたのであろうか。

そこで、本稿では、当時の時代背景や執筆前後の状況等に触れつつ、ジェームズ一世の宮廷に向けて書き上げられたこの詩を具体的に検討し、ダンの宮廷に対する考えがこの中にどのように表現されているのかを、詳しく考察したい

と思う。

Ⅱ サマセット伯の宮廷結婚

女王の重臣であったロバート・セシルの仲立ちで1603年に英国王となったジェームズ一世は、即位後しばらくは、女王の統治体制をほぼ全面的に踏襲している。だが、次第に、そしてソールズベリ伯となっていたセシルが1612年5月に没した後は一段と、彼独自の政治を行なう方向に向かうことになった。ところで、このジェームズ一世の統治に関して注目すべき特色の一つは、彼が〈王権神授説〉(the Divine Rights of Kings)の受容を英国国民に露骨に強制したことにあろう。⁵ 勿論、絶対主義下の英国では、女王の権威も権力も神聖なものであった。だが、ジェームズ一世は、この〈王権神授説〉を政治理論として実行に移す為、枢密院を弱体化させ、議会を無視する一方、主教制度を提唱し、ごく少数のつまらぬ寵臣を重用したのである。この結果、彼の宮廷では、国の要職の一切の任命を託された寵臣が幅を利かせ、阿諛・追従にのみたけた奸臣が群がる一方、良心的な賢臣の姿が消えることになった。しかも、ジェームズ一世は、貴重な国費を浪費して諸行事を仰々しく行なわせ、大規模な仮装舞踊会や豪華な宴会を催し、風紀の乱れをも放任したので、彼の宮廷は女王の宮廷より、いや、どの時代の宮廷と比べても、表面的には最もきらびやかでありながら、実は最も墮落した社会となったのである。⁶

では、このようにあさましく乱れた宮廷において挙げられたサマセット伯の結婚とは、当時、一体どのような意味を担っていたのであろうか。

まず、新郎サマセット伯は、たまたま容姿端麗で人当たりが良いばかりに、御前槍試合での落馬による腕の骨折がきっかけでジェームズ一世の寵遇を得、1607年にナイト爵に叙せられ、以後、学問や教養・政治的信念等において何ら秀出たところがなかったにもかかわらず、次々と昇進し、この結婚の頃には宮廷社会において国王に次ぐ地位にあったという、お小姓あがりの典型的成り上り者である。片や、新婦となるフランシス・ハワードは、サフォーク伯の娘ではあったが、前夫エセックス伯との七年に渡る結婚生活の無効の申し立てを三

ヶ月前に漸く認められたばかりの、しかも他にも殺人その他の色々と黒い噂のある悪名高い女性であった。⁷

従って、このような二人の間に生じた恥づべき密通関係を正当化する為の結婚に、周囲の強い反対を押し切って国王がわざわざ支援を買ってでたのは、サマセット伯とサフォーク伯一族との結びつきが、彼の統治に好都合だったことであろう。だが、最も大きな理由は、先にも述べたとおり、〈王権神授説〉を理論的根拠とする親政実現の際の傀儡政治家に仕立て上げるべく、サマセット伯を懐柔する必要が国王側にあったからである。⁸

ところで、このように国王と寵臣サマセット伯との間に醜い馴合関係があること、そして、この結婚には多くの無理があることは、当時、公然の秘密、即ち、広く世間に知れ渡っていないながら、表向きは秘密とされていた事実であった。従って、これらへのあからさまな言及は言うに及ばず、何気ない言及ですら、誤解される危険を伴ったらしい。それ故、この時執筆された諸作品の中では、当然のことながら、結婚する二人への言及は意識的に回避され、その賛美がひたすら、国王にのみ向けられることになったのである。⁹

Ⅲ ダンとサマセット伯

ところで、数年前からベッドフォード伯夫人の、そして約2年前からドリュリ卿の庇護を得て登用のチャンスを狙っていたダンは、1612年の10月、伯夫人とロチェスタ子爵（後にサマセット伯となるロバート・カー）とが犬猿の仲であることを知りながら、子爵の庇護をも願い出ている。この事実は、ソールズベリ伯没後の宮廷では、子爵がどれ程うさん臭い人物であるにせよ、子爵をパトロンとすることが、登用を最も確約するルートであったことを雄弁に物語っている。以後、子爵は庇護者として、数回彼の猟官運動に力を貸し、又、度々彼に経済的援助も与えたいらしい。この頃のダンの子爵宛の書簡には、厚かましい依頼やお追従、あるいは感謝の気持や不満等が多々盛り込まれており、二人の間はかなり親しい関係があったことを立証している。¹⁰

さて、ダンが問題の祝婚歌を伯に献呈したのは挙式から数週間後の、つまり

1614年の1月下旬か2月上旬のことらしい。とすると、上述のような被庇護者の立場にあった彼が、何故このように献呈の時期を遅らせたのであろうか。いや、そもそも一体どのような気持でこの祝婚歌を執筆したのであろうか。

まず、献呈の遅れた理由としては、確かに丁度挙式の頃、ダンが失明の恐れさえあった重い眼病に罹って田舎に引き籠っていたという伝記的事実は見過ごせないかもしれない。だが、私にはこの事実はその理由として十分なものとは思えない。何故なら、この点について、又、当時の彼の心境について、いくつかの興味深い事実を語っていると思われるダンの書簡が二通、私達に残されているからである。その一通は、日付こそはっきりしないが、当時書かれたと推定される次の書簡である。

“To the Honourable Knight Sir Robert Ker.

“Sir,—I had rather like the first best; not only because it is cleanlier, but because it reflects least upon the other party, which, in all jest and earnest, in this affair, I wish avoided. If my muse were only out of fashion, and but wounded and maimed like free-will in the Roman Church, I should adventure to put her to an epithalamium. But since she is dead, like free-will in our Church, I have not so much muse left as to lament her loss. Perchance this business may produce occasions, wherein I may express my opinion of it, in a more serious manner. Which I speak neither upon any apparent conjecture, nor upon any overvaluing of my abilities, but out of a general readiness and alacrity to be serviceable and grateful in any kind. In both which poor virtues of mine, none can pretend a more primary interest than you may in your humble and affectionate servant,

J. Donne.”¹¹

(下線筆者)

もう一通は、1614年1月19日という日付の入った、ヘンリー・グッチャー卿宛と考えられる書簡であり、この中ではダンは次のように言及している。

some appearances have been here of some treatise concerning this nullity, which are said to proceed from Geneva, but are believed to have been done within doors, by encouragements of some whose names I will not commit to this letter.

“My poor study having lain that way, it may prove possible that my weak assistance may be of use in this matter in a more serious fashion than an epithalamium. This made me therefore abstinent in that kind; yet, by my troth, I think I shall not escape. I deprehend in myself more than an alacrity, a vehemency to do service to that company, and so I may find reason to make rhyme. ¹²

(下線筆者)

では、これらの書簡から推測される事実とはどのようなものであろうか。まず、その第一は、新婦の先の結婚を無効とした判決に対して、周囲に不満や失望、疑惑が引き起こされていたことと、この論争に係り合うことには危険が伴うことを、ダンも他の人々と同様、よくわきまえていたらしいという点である。第二には、第一の書簡では、“in a more serious manner”，第二の書簡では、“in a more serious fashion than an epithalamium”と繰り返されているように、ダンは祝婚歌を書くということをそれ程重要とは考えていなかったという点である。第三には、彼が前もって、祝婚歌で祝い以上のもっと“serious”な手助け（具体的には、離婚を法律面で弁護することを考えていたと思われる）がしたい、という意向を申し出てあったのに、そちらの面での手助けへの要請は結局受けられなかったらしいという点である。そして、第四には、彼が第二の書簡中で、“yet, by my troth, I think I shall not escape”と述べているように、彼はやはり、祝婚歌を書かずに済ますことはできないだろうと感じていたらしい点である。

そこで、以上の点を総合し、献上したという事実と突き合わせてみると、私達はミルゲイトが“an odd mixture of willingness and reluctance”と指摘するように、¹³ダンは極めて複雑な気持ちでこの作品に取り組んだということ、だが、それでいて、彼はその時の自分の立場と書き上げた作品とを十二分に検

討した挙句、時期が遅れているのを承知の上で献呈に踏み切ったらしい、ということが推測できよう。確かにいやいや献呈させられた作品であったかもしれない。が、献呈している以上、ダンにとって、十分に推蔽を重ねた自信作——いや、野心作であった、ということも又あり得るのである。

Ⅳ 「サマセット伯への祝婚歌」

1

祝婚歌 (Epithalamium) とは、語源をたどれば、結婚の夜、二人の部屋の外で歌われる祝いの歌ということになる。¹⁴ だが、ギリシャ時代からルネサンス期に至るまで、概して、貴族や高官の結婚を祝して、披露宴の席上、大勢の客の前で読み上げられるという公的な詩型として扱われてきた。¹⁵ 従って、詩人達は多くの場合、結婚する二人の個人的体験を扱いながらも、祝婚行事の一端を担うつもりで、広い範囲の多数の読者を念頭に置き、公的な性格に付随する諸々の約束ごとを守りつつ、祝婚歌を執筆しなければならなかったのである。となると、一般的に言えば、祝婚歌というジャンルには、個性の反映とか、個人的な感情の吐露は余り認められない、ということになるう。

さて、ダンのこの「サマセット伯への祝婚歌」も、サマセット伯夫妻が二人の室で二人だけで楽しむ為に執筆された作品ではない。ジェームズ一世の御前で読み上げられる為のものである。ところで、ダンはこの祝婚歌執筆以前に祝婚歌を二つ書いているが、第一作の「リンカン法学院での祝婚歌」(“Epithalamion made at Lincolnes Inne”) は、リンカン法学院在学中の彼が、当時の祝婚歌(とくにスペンサーの祝婚歌を意識していたらしい)に歌われる理想的結婚と、ロンドンでおこなわれている当世風結婚との較差を揶揄する目的で書き上げ、友人間に回覧させたものらしい。¹⁶ これに対し、第二作の「王女エリザベスへの祝婚歌」(“An Epithalamion, or Mariage Song on the Lady Elizabeth, and Count Palatine being married on St. Valentines Day”) は、長い題にも明示されているとおり、1613年2月14日におこなわれた、国王のたった一人の王女とバラタイン伯との宮廷結婚を祝って書かれたも

のである。そこで、この第二作と三作目の「サマセット伯への祝婚歌」とは、共に公的な性格を有し、しかも執筆時期が極めて接近しているということで、まとめて論じられることが多い。

ところが、この「サマセット伯への祝婚歌」には、「王女エリザベスへの祝婚歌」と明らかに異なったところがある。それはこの作品が、いわゆる祝婚歌の部分——この部分の行数は、第二作の行数と殆ど変わらない——とエクローグという題のついた、二人の人物による対話の部分との二部から成り立っている点である。そこで、論述の都合上、この祝婚歌全体の概略を述べておくことにしよう。

エクローグの部分は114行からなり、詳しくは104行のプロローグにあたる部分と、10行のエピローグにあたる部分とに分かれている。このエクローグには冒頭に次のような散文体の文がつけられ、エクローグの内容を説明している。

Allophanes finding Idios in the country in Christmas time, reprehends his absence from court, at the marriage of the Earle of Sommerset, Idios gives an account of his purpose therein, and of his absence thence. ¹⁷

まず、アロファネス (Allophanes) がイディオス (Idios) に向かって、万物の凍る冬の最中に〈地方〉に引き籠る狂気を詰り、寒々と枯渇した〈地方〉に比べて、二人の結婚によって早々と春を迎えることになった〈宮廷〉が如何にすばらしいところであるのかを強調する (ll. 1—39)。

このアロファネスの非難に対してイディオスは、国王の神に由来する恩恵を称え、〈宮廷〉の縮図である〈地方〉にいても、いや、〈地方〉にいてこそ、より深く国王の恵みが認識できると主張する (ll. 39—55)。

ところが、アロファネスはイディオスのこの主張を負け惜しみの詭弁に過ぎないと断定し、国王に仕えてこそ、人の真の力が発揮され、名誉が世に輝くの

だ、と力説する〔II. 55—91〕。

そこで、イディオスは、実は自分にもそのことはわかっていたのだが、祝婚歌がまだ出来上がっていなかったので式に欠席してしまったと弁解し、ここでこの時には既に書き上げてあった祝婚歌をアロファネスに差し出す〔II. 91—104〕。そして、この祝婚歌を聞き終ったアロファネスが、イディオスにこの詩の宮廷への取り次ぎを申し出る〔II. 226—235〕。これがエクログの結びの部分であり、この作品全体の結末でもある。

祝婚歌本体の部分は、各々に小題を持つ各連11行ずつの11連、計121行から成り立っている。まず、各連の小題と内容とをごく簡単に追ってみると、語り手は、第一連「結婚の時」では、二人の結婚が十二月末に行なわれた事実に言及し、第二連「二人の同等性」では二人を、第三連「花婿の起床」では花婿を、第四連「花嫁の起床」と第五連「花嫁衣裳」では花嫁を各々称えている。第六連「教会へ向かう」では二人が教会で一つに結ばれることを述べ、第七連の「祝福」では結ばれた二人を祝う。第八連「祝宴と余興」第九連「花嫁の就寝」第十連「花婿の到着」では二人の床入りを中心に語り、第十一連の「おやすみ」では二人の愛が永遠に続くことを祈願し、この詩を閉じている。

ところで、この祝婚歌本体は一読した限りでは、祝婚歌の長い伝統を踏まえた、かなりフォーマルな作品、という印象を受ける。何故なら、まず、先に見たように、この詩の時間の流れが伝統的祝婚歌での時間構成——当日の朝に始まり、教会での結婚式を経て、二人の床入りに終る——にはほぼ従っている点、¹⁸次に、この詩の語り手が、上流階級に属するパトロンの婚礼にあたり、当然分担すべき“public celebrator”の役割を十分に果たしている点、¹⁹又、数連（第一、二、四、十一連等）で古典や神話に言及している点、更に、伝統的祝婚歌でしばしば用いられるリフレインの効果を狙って、各連の末尾の二行で、必ず、花婿の心と花嫁の眼について描写している点等の特徴を備えているからである。

が、しかし、今一度注意深く検討してみると、私達は型どおりに見えたこの

祝婚歌本体の部分にも、ダンの詩に度々認められる一種の緊張感が漂っており、しかも、祝婚というこの詩の激肅な性格にそぐわない——しかし、彼らしい——洒落や地口といった言葉の遊びが少なからず書き込まれていることに気が付かざるを得ない。例えば、第三連の“divorce”〔l. 127〕、第五連の“wormes and dust”〔l. 154〕、第十連の“gellie”〔l. 205〕等の語句は、どれ程丁寧に説明を加えようと、祝婚歌に相応しいとは考えられないのである。加うるに、この祝婚歌本体の部分は、これだけで独立しているのではなく、前後のエクローグの部分と十二分に緊密につながっていることにも気付く。マックガウアンが“thematic consistency”があると指摘しているように、²⁰ 本体の中に認められる、対立しあっている二つの価値体系にしろ、繰り返し言及される花婿の心と花嫁の眼にしろ、実は既にエクローグの中で詳しく説明されていたものだったからである。そこで、私達はこの本体はエクローグという枠組の中で歌われた祝婚歌として読まねばならない、いや、言い換えれば、エクローグの部分は、ただ単に献呈が遅れたことを弁解する為に付け加えられたという付随的なものではなく、本体の部分と合わさって、一つの「サマセット伯への祝婚歌」を構成している、という極めて重要な点に思い至る。勿論、執筆の順序からすれば、先に本体が書き上げられ、後でエクローグが付け加えられたのかもしれない。しかし、ダンには推敲する時間的余裕はたっぷりあったはず、従って、手をつけた順序はこの際、問題ではないのである。

2

ところで、ダンはそれまでに一度も、エクローグ（牧歌的対話）と名づけたものを書いてはいない。とすると、彼は何故、この祝婚歌に敢えてエクローグという枠組を与えたのであろうか。（勿論、遅れたことへの弁解を書く為であったにせよ、何故エクローグ形式を用いたのか、ということでもある。）この疑問に対して、私としては以下に述べる四つの点を理由としてあげてみたい。

- (1) 第一には、元来、〈牧歌〉と祝婚歌と〈宮廷〉とは十分密接な関係があ

ったという点である。何故なら、まず、英国ルネサンス期における祝婚歌の歴史は、宮廷人に愛読されたフィリップ・シドニイ卿の *Arcadia* (1590年出版) 中の第三エクローグで歌われている祝婚歌と、バーソロミュ・ヤングがスペインのモンテメイアの作品を英訳した *Diana* (1598年出版) 中に挿入されている祝婚歌とに始まり、そのどちらも〈牧歌〉であったからである。²¹ 加えて〈牧歌〉はジェームズ一世の宮廷では、ことの外好まれていたジャンルの一つでもあり、この頃のダンには、献呈するとなれば、自分の作品を宮廷の人々に気に入ってもらう必要があったからでもある。尤も、当時の彼には参内は許されていなかった。だが、多くの友人や知人を通して、彼は宮廷の好みを十分把握できる立場にもあったのである。²²

(2) 第二の点は、このエクローグという枠組が、挙式の時、田舎に引き籠っていた事実を巧く弁解する格好な(?) 論拠を提供してくれるということである。フランク・カーモードによると、ルネサンス牧歌では、特に〈宮廷〉(都市) と〈地方〉(田園) との対立というテーマがよく論じられたと言う。²³ つまり、ダンはこの牧歌の中心テーマに引っ掛けて、イディオスに彼が〈地方〉にいたのは、〈地方〉での冥想的生活の方が、〈宮廷〉での行動的生活より、国王の恩恵と宮廷の栄光とをより深く認識できるからだ、と弁解させることができたからである。

No, I am there.

As heaven, to men dispos'd, is every where,
 So are those Courts, whose Princes animate,
 Not onely all their house, but all their State.
 Let no man thinke, because he's full, he'hath all,
 Kings (as their patterne, God) are liberall
 Not onely'in fulnesse, but capacitie,
 Enlarging narrow men, to feele and see,
 And comprehend the blessings they bestow.
 So, reclus'd hermits often times do know

More of heavens glory, then a wordling can.

[ll. 39—49]

しかしながら、実は私達はここで、イディオスのこの弁解の論旨を、〈牧歌〉の伝統に照らし合わせてみる必要がある。何故なら、牧歌の世界では、殆ど常に、〈地方〉での冥想の主題は、〈宮廷生活の悪徳と田園生活の幸福〉であったのに、イディオスの冥想の主題はまさにそれを逆転させたものであったからである。しかも、成る程、イディオスもアロファネスも現在〈地方〉にはするが、二人共、牧人、あるいは牧人を装った宮廷人でもなく、宮廷人そのものである。（尤も、イディオスは宮廷から締め出されているが、アロファネスは国王や伯にかなり近いところにいるらしい。）更に、二人は対話の始めでは対立していたかに見えたが、実は「国王が全ての権力と善の根源であり、宮廷が全世界の象徴であり、宮廷からの生气によって地方が生かされている」と考える点では、全く同意見だったのである [ll. 41—43]。

それ故、イディオスは最初は〈地方〉に隠棲する意義を主張しているが、アロファネスにいても簡単に説得されてしまう。そして、〈宮廷〉から遠ざけられ、〈地方〉に住むことは、死んで埋葬されているようなものだ、と自らも次のように認めるのである。

But since I'am dead, and buried,...

[l. 101]

従って、このエクローグに描かれている〈地方〉は、自然美に溢れた、素朴で無垢で快い世界——*locus amoenus*——ではなく、冬の冷たく侘びしい、疎外された者の世界である。つまり、ここでは〈地方〉は、〈宮廷〉の輝きを際立たせる為の否定材料として描かれているに過ぎない。一方、祝婚歌本体にしても、形の上では地方にいるイディオスの歌ったものではあるが、この中で祝われているのは宮廷結婚なのだから、当然、宮廷風であり、都会風なのである。結局、ダンはこの作品では、エクローグと題をつけ、要旨 (Argument) に相当する散文を冒頭に置く、といった牧歌的設定を意識的に用いながら、その主張するところは、牧歌本来の価値観をわざと逆転させてしまっている。こ

う考えると、ダンはこの時点で当時多く書かれた月並な牧歌詩のパロディを行なっているということになる。

(3) しかしながら、ダンがこの詩でおこなっているのは、実はただ単に機械的にルネサンス牧歌をもじってみせた、ということだけではない。ダンはエクログという枠組を用いることによって、つまり、彼自身ではない仮想の対話者を設定することによって、普通の祝婚歌には盛り込みにくいような主題を扱うことができたらしい。何故なら、牧歌では、

The guise of shepherds was a handy camouflage for actual men.²⁴

であった如く、仮想の対話者はダンにとって格好の隠れ蓑となり、スペンサーの *Shepherdes Calender* (1579年出版) の中で E. K が、

And also appeareth by the basenesse of the name, wherein, it semeth, he chose rather to vnfold great matter of argument couertly, then professing it, not suffice thereto accordingly.²⁵

と述べ、ジョージ・プッテナムが *The Arte of English Poesie* (1589年出版) の中で、

the Poet devised the *Eglogue*... not of purpose to counterfeit or represent the rustically manner of loves and communication: but under the vaile of homely persons, and in rude speeched to insinuate and glaunce at greater matters, and such as perchance had not bene safe to have disclosed in any other sort, which may be perceived by the Eglogues of *Virgill*, in which are treated by figure matters of greater importance then the loves of *Titirus* and *Corydon*.²⁶

と定義したように、ダンはこの枠組によって、重大な問題にさりげなく言及で

きたからである。いや、それどころか、彼はこれによって、自責の念に駆られることも少なく、あるいは他人の非難をそれ程恐れることもなく、国王への賛美や伯へのお追従を歌い込むことが出来、又、同時に、遠回しの諷刺や当て擦りさえおこなうことが出来た。勿論、祝婚歌の中でも国王を賛美できたであろう。だが、これ程長々としかも大袈裟にはできなかったに違いない。そこで、私は以上の点を、この枠組採用の三つ目の理由と考えたいのである。

では、ダンはこの詩の中で、具体的にどのように国王を称え、彼の宮廷を賛美しているのであろうか。まず、エクローグでは次のように他の宮廷を貶し、

Most other Courts, alas, are like to hell,
 Where in darke plotts, fire without light doth dwell:
 Or but like Stoves, for lust and envy get
 Continuall, but artificiall heat; [ll. 33—36]

これらの宮廷に比べて、国王の恩恵が全員に注がれ、更に伯の結婚によって一段とその輝きを増したこの宮廷は、まるで “an everlasting East” [l. 38] のようだと述べ、〈王権神授説〉については、“Kings (as their patterne, God)” [l. 44] で、国王の平和政策については “sweet peace” [l. 53] で触れたあと、この国王のもとで、彼の宮廷が如何に円滑に運営されているかを、次のように描出してみせている。

Hast thou a history, which doth present
 A Court, where all affections do assent
 Unto the Kings, and that, that Kings are just?
 And where it is no levity to trust?
 Where there is no ambition, but to'obey,
 Where men need whisper nothing, and yet may;
 Where the Kings favours are so plac'd, that all
 Finde that the King therein is liberall
 To them, in him, because his favours bend
 To vertue, to the which they all pretend? [ll. 75—84]

しかも、国王と伯とが上の引用にみるように親密な間柄であったことが、ここに続く

Our little Cupid hath sued Livery,
And is no more in his minority,
Hee is admitted now into that brest
Where the Kings Counsellors and his secrets rest.

[ll. 87—90]

でも、祝婚歌本体でも次のように言及され、

How, having laid downe in thy Soveraignes brest
All businesses,...

[ll. 133—134]

この両者の間の好ましい君臣関係が、孫子の代まで末長く存続するようにという祈願が第七連でなされている。

Raise heires, and may here, to the worlds end, live
Heires from this King, to take thankes, you, to give,
Nature and grace doe all, and nothing Art;

[ll. 177—179]

尤も、実のところ、これらの賛辞のどこまでが心からのもので、どこまでがお追従かを決めるのは難しい。確かに、賛辞も度を越すと、裏返しの諷刺すら感じさせることもある。しかし、このエクローグ中でのダンの賛辞の調子は極めて真摯でかつ執拗であり、それが私達読者に、彼はここで自らが理想とする、国王と宮廷とのあるべき姿を描き出しているのだ、という印象を与えずにはおかないのである。

一方、遠回しの諷刺や当て擦りは、エクローグより、祝婚歌本体に多く見られる。ダンが、当時の文人達が意識的に言及を避けた二人の姿を、この本体の中で、比較的はっきりと描き出し、言及しにくいことにも敢えて触れているか

らである。では、どのような言及や当て擦りがおこなわれているのかを、検討してみよう。

まず、本体の第二連では、表面的には二人が同じように愛し合っていることを祝福しているのだが、実は伯爵の妻であった女性と結婚するというので、新郎が式のほんの数週間前（1613年11月3日）に、ロチェスタ子爵からサマセット伯爵に格上げされた事実を当て擦っているのである。又、同じ連の“unjust opinion”〔l. 123〕や“envies Art”〔l. 124〕には、二人の結婚に対して、周囲に反対や妬みがあったこと、又、第六連中の次の二行、

The Church Triumphant made this match before,
And now the Militant doth strive no more;

〔ll. 166—167〕

では、地上の教会で、新婦の前の結婚を無効とするかどうかで、激しい論争があったことに言及しているのである。そして、このような言及や当て擦りが、先に触れた言葉の遊びと共に、この祝婚歌の性格を実に曖昧なものにしていることは、言うまでもなからう。

(4) ところで(3)で検討したように、仮想の対話者を設定することで、ダンはお追従や当て擦りを書き込めた。だが、対話者の設定は、ダンにこの詩の中に自分の個人的感情を盛り込み易くもしたらしい。そこで、この点を四つ目の理由としたい。ダンは二人の対話者のどちらにもかなり卒直に彼自身の気持を語らせているので、エクローグの部分が **personal** であることは、マイナーの指摘を待つまでもなく、²⁷ 誰れの眼にも明らかである。一方、祝婚歌本体は **personal** とは言い難い。だが、先にも述べたとおり、間接的な形でダンの内面を映し出しているところもないわけではないのである。

では、エクローグの部分が、どのように **personal** であるのか、という点に話を進めよう。この点について、グリアソンは、イディオスはダン自身を表わし、アロファネスはこの詩を宮廷に取り次いだ友人ロバート・カー卿を表わす

と考えた。こう推論する根拠は、イディオスとは、ギリシャ語で “the private man, who holds no place at Court” を意味し、アロファネスもやはりギリシャ語で, “one who seems like another” を意味し、丁度サマセット伯と同姓同名であった上述の友人とびったり符号するからである。²⁸ この説は現在でも多くの人々に受け入れられている。が、勿論、この説を採らない学者もいる。²⁹ では、私達は、これら二人の対話者をどのように捉えることが出来るだろうか。私としては、この二人をダンとその友人、というより、ダンの中の二人の自己、即ち、一人の自己と友人という外観をまとったもう一人の自己と捉え、この二人の対話を、度重なる猟官運動の失敗に自信を喪失し、宮廷仕官を断念しかかっている自己と、あくまで宮廷仕官を願うもう一人の自己との対話と考えてみたい。何故なら、元来、牧歌の登場人物と作者との関係は曖昧なものであり、必ずしも一人の登場人物だけが作者の意見を代弁している訳ではないからである。

そこで、こう捉えると、説得されたイディオスの “And I scap'd not here” [1. 97] や、

As I have brought this song, that I may doe
A perfect sacrifice, I'll burne it too. [11. 226—227]

には、ダンのこの祝婚歌を献呈しない訳にはいかなかったという自己弁護の姿勢が感じられ、更に、やはりイディオスの次の言葉には、

Reade then this nuptiall song, which was not made
Either the Court or mens hearts to invade,
[11. 99—100]

宮廷に認められたいが、むき出しのお追従とは受け取られたくはないという、ダンの微妙に揺れ動く内面が透けて見える。だが、アロファネスが国王に仕える意義を力説する次の引用部分には、宮廷仕官に大きな価値を見い出す、いや、見い出そうとするダンの気持も表明されていることになる。

As, for divine things, faith comes from above,
 So, for best civill use, all tinctures move
 From higher powers; From God religion springs,
 Wisdome, and honour from the use of Kings.

[ll. 65—68]

従って、この詩の中で祝婚歌を歌うのはイディオスであるが、アロファネスがイディオスを説得し、この祝婚歌を宮廷に献呈させるのだから、結局、アロファネスの方がイディオスより、ダンの内面により近い処に位置している、とすら言えるのではないか。勿論、私はここで、アロファネス＝ダンと主張したいのではない。しかし、田舎に籠って世間を知らず、アロファネスに“fool” [l. 13] と呼ばれるイディオスのみが、当時のダンの心境を語っているはずはない。成る程、友人カー卿もダンに献呈を勧めたかもしれない。だが、私は、このような対話がダン自身の心の中でも十分なされた後、この祝婚歌が献呈されたと考えたいのである。

3

以上、ダンが祝婚歌本体にエクログという枠組を特に設けた理由について検討してみた。それでは、結局のところ、この詩において、ダンと牧歌の伝統とは、一体どのような関係にあったと言えるのであろうか。

ダンは生涯、牧歌に余り関心を示さなかったらしい。彼の詩作品の中で、牧歌とのつながりを感じさせるのは、この祝婚歌の他にはわずかに *Songs and Sonets* 中の“The Bait”と題する小品だけである。³⁰ しかし、彼が恋愛詩人として活躍していた時期は、実は英国に *England's Hericon* (1600年出版) を頂点とする pastoral lyric の黄金時代が到来していた頃であり、彼と同時代の多くの詩人が、各々その取り組み方は異なるにしろ、とにかく牧歌に手を染めていた頃であった。³¹ では、ダンには何故関心がなかったのであろうか。勿論、理由は色々考えられよう。例えば、何事につけても単なる模倣を嫌い、自らの個性を重んじたと言われるダンには、牧歌の流行そのものが拒絶反応を

誘ったのかもしれない。だが、私がここで理由として特に取り上げたいのは、ダンにあっては〈地方〉というものが、〈宮廷〉に対抗しうる意義と力を持つ社会形態としては全く認識されていなかった、という点である。つまり、ダンにとって、〈地方〉は冥想の場ではあり得ても、物を産み出すような積極的な価値を持つ場ではあり得なかった。しかも、その冥想にしても、主題は常に〈宮廷〉であった。となれば、彼が〈地方〉と〈宮廷〉との価値の違いを追求するはずはないのである。尤も、この点は、ダンが純粹に都会っ子であったことを証明しており、彼の詩の特徴の一つを、従来 of 詩の世界の“urbanizing”にあった、とする好意的な評価の基盤ともなろう。³² が、いずれにしろ、この祝婚歌でのダンとルネサンス牧歌との結び付きは、この意味では、かなり表面的なものであったということになる。

しかしながら、ダンはこの詩を書くにあたり、ルネサンス牧歌の持つもう一つの特徴は大いに重要視している。それは何か。重層性、多義性、あるいは豊かさといった面である。つまり、ルネサンス牧歌には、古典牧歌以上に、雑多な要素の混入を許すという、マックガウアンが“loose and freer”と説明している、³³ 自由で柔軟な一面があり、この面がダンの興味を引いたのではないか。こう考えると、ダンはこの詩において、ルネサンス牧歌の特徴の一つを、極めて巧妙に生かしていることになる。ミルゲイトはこの点について、

This is a good example of his lordly ways
with traditional genres. ³⁴

と述べ、積極的な評価を与えているが、確かに、ここでのような牧歌のとらえ方は、読者に牧歌本来の意図を見失わせる危険を内包しているにしろ、³⁵ 奇抜で大胆な、如何にもダンらしい牧歌解釈であったとも言えよう。

V 結 論

ダンはこの祝婚歌を献じたことで、恩恵を受けたのか、あるいは国王や伯の

ご機嫌を損ねてしまったのか、この点については、残念なことに資料の上では追求のしようがない。ダン自身もその反響を窺っていたらしいが、ある書簡中に次のような簡単な言及が残されているに過ぎないからである。

“I cannot tell you so much, as you tell me, of anything from my Lord of Som [erset] since the epithalamium, for I heard nothing.”³⁶

尤も、その後の伯とダンとの関係から類推すると、プラスに作用しなかったにしても、マイナスに働いたとも思われない。伯は、実らなかったにしろ、その後もダンの猟官運動を助け、1614年の11月には、「彼には聖職が相応しい」という国王の言葉をダンに伝え、同年12月には、叙任直前のダンに自選詩集を編纂させて、自分に献呈させようともしているからである。つまり、この詩は、曖昧な要素を含みながらも、被庇護者のノルマとしては、一応通用するものではあったらしい。

とはいうものの、ダンには、賛辞を手際よく盛り込んだ、当たり障りのない祝婚歌を献呈する道も、実はあったのである。それなのに、何故、エクローグという枠組を特に選んで、お追従ばかりでなく、諷刺や当て擦りまで挿入しようとしたのであろうか。

確かに当時の宮廷は腐敗と墮落の中心であり、伯の結婚はそのような宮廷を最も象徴する出来事であったから、「宮廷が汚れているが故に自分は宮廷人になれないでいる」と感じていたダンが、³⁷ この結婚に関する醜い現実を見落としていたはずはなかった。しかし、同時に、彼は伯の庇護のもとにあり、伯の仲介で宮廷に登用されるという望みをあいかわらず捨て切れずにもいた。このように、当時のダンの宮廷に対する気持は、曖昧でかつ^{アンビバレント}両面価値的な、つまり、現実の宮廷を受け入れようとする感情と反発したい感情とが微妙に交錯するものであったのである。そこで、結局、祝婚歌を書くことにしたが、今まで考察してきたように、ダンは自分自身に対して、そして恐らくは読者に対しても、自らの道徳的潔白を守るべく、極めて慎重にこの詩に取り組んだのであ

る。

しかし、迷った挙句であったにしろ、どれ程慎重に書き上げたものであったにしろ、この祝婚歌を献呈したという事実、そして、その中に国王とその宮廷との理想を見事に描き出している事実は、その後のダンの姿、即ち、国王の御用牧師として時に良心の呵責に悩まされつつもその勤めを全うする姿を予告していよう。何故なら、こうした行動的生活への選択こそ、青年時代の潔癖さから晩年の妥協へと向かう、彼の人生の軌跡の中年期での足取りを、実に鮮明に映し出しているからである。

(1981. 1. 31)

注

- * 本稿は、日本英文学会中部地方支部第33回大会（1980年10月4日）において口頭発表したものに一部補筆したものである。
1. Margaret M. McGowan, "‘As Through a Looking-glass.’" A. J. Smith ed., *John Donne, Essays in Celebration* (Methuen & CO LTD., 1972) pp. 175-218.
 2. M. H. Abrams, and others eds., *The Norton Anthology of English Literature, Third Edition* (W. W. Norton & Company, 1962) Vol. 1, p. 1091. Ruth Wallerstein, *Studies in Seventeenth-Century Poetic* (The University of Wisconsin Press, 1965) p. 68.
 3. 拙稿「Donne と「墮落天使」としての Essex 伯」*Athena* 13号 (1979年) pp. 8-27.
 4. Helen Peters, ed., *John Donne, Paradoxes and Problems* (Clarendon Press, 1980) p. xliii.
 5. ジェームズ一世は1598年に *The Free Law of True Monarchies* (『自由君主制の真の法則』) を著している。この書物が示すように、彼は英国王即位以前から<王権神授説>の熱烈な信奉者であった。
 6. J. R. グリーン著、中村祐吉訳『イギリス国民史』(鹿島研究所出版会、昭和43年) pp. 811-812.
 7. "Carr, Robert," *Dictionary of National Biography*, (Smith, 1908-1909) Vol. III, pp. 1081-1085.
 8. *Loc. cit.*
 9. McGowan, *op. cit.*, pp. 200-201.
 10. Edmund Gosse, *The Life and Letters of John Donne* (Peter Smith, 1959) Vol. II, pp. 20-30.

11. *Ibid.*, pp. 26-27.
12. *Ibid.*, p. 25.
13. W. Milgate ed., *John Donne, The Epithalamions, Anniversaries and Epicedes* (Oxford U. P., 1978) p. xxiv.
14. Alex Preminger ed., *Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics* (Enlarged Edition, 1974) p. 249.
15. Thomas M. Greene, "Spenser and the Epithalamic Convention," *Comparative Literature*, 9 (1957) pp. 218-219.
16. Milgate, *op. cit.*, p. xxii.
17. *Ibid.*, 以下, 祝婚歌の引用はこの版からとする。
18. McGowan, *op. cit.*, p. 212.
19. *Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics* p. 250.
20. McGowan, *loc. cit.*
21. Greene, *op. cit.*, p. 217.
22. McGowan, *op. cit.*, pp. 202-203.
23. Frank Kermode ed., *English Pastoral Poetry from the beginning to Marvell* (G. G. Harrap, 1952) p. 38.
24. S. K. Heninger, Jr., "The Renaissance Perversion of Pastoral," *Journal of the History of Ideas* XXIII (1961) p. 255.
25. J. C. Smith and E. DE. Selincourt eds., *Spenser, Poetical Works* (Oxford U. P., 1966) p. 418.
26. Kermode, *op. cit.*, p. 29.
27. Earl Miner, *The Metaphysical Mode from Donne to Cowley* (Princeton U. P., 1969) p. 11.
28. H. J. C. Grierson ed., *Poems of John Donne* (Oxford U. P., 1912) Vol. II. p. 94.
29. McGowan, *op. cit.*, pp. 210-211.
30. Clay Hunt, *Donne's Poetry* (Yale U. P., 1954, reprinted 1969) p. 123. ビーター・V・マリネリ著, 藤井治彦訳『牧歌』(文芸批評ゼミナール15)(研究社, 昭和48年) p. 38, 40.
31. Kermode, *op. cit.*, p. 22.
32. Miner, *op. cit.*, p. 38.
33. McGowan, *op. cit.*, p. 210.
34. Milgate, *op. cit.*, p. xxiv.
35. Heninger, *op. cit.*, 参照。
36. Gosse, *op. cit.*, p. 37.
37. Miner, *op. cit.*, p. 32 及び前述の拙稿 p. 17 参照。

参 考 文 献

1. Biography

Bald, R. C., *John Donne: A Life*, Oxford U. P., 1970.

Gosse, Edmund, *The Life and Letters of John Donne*, Peter Smith, 1959.

Dictionary of National Biography, London, Smith, 1908-1909, Vol. III.
2. Editions of Donne's work

Epithalamions, Anniversaries and Epicedes, ed. W. Milgate, Oxford U. P., 1978.

Paradoxes and Problems, ed. Helen Peters, Clarendon Press, 1980.

Poems, ed. H. J. C. Grierson, Oxford U. P., 1912, reprinted 1968.
3. Critical Studies

Hunt, Clay, *Donne's Poetry*, Yale U. P., 1954, reprinted 1969.

Jackson, Robert S., *John Donne's Christian Vocation*, Northwestern U. P., 1970.

Jonas, Lean, *The Divine Science*, Columbia U. P., 1940, reprinted 1973.

Kermode, Frank ed., *English Pastoral Poetry from the beginning to Marvell*, G. G. Harrap, 1952.

マリネリ, ピーター, V., 藤井治彦訳『牧歌』(文芸批評ゼミナール15) 研究社, 昭和48年。

Matsuura, Kaichi, *A Study of the Imagery of John Donne*, Kenkyusha, 1953.

Miner, Earl, *The Metaphysical Mode from Donne to Cowley*, Princeton U. P., 1969.

Wallerstein, Ruth, *Studies in Seventeenth-Century Poetic*, The University of Wisconsin Press, 1965.

Greene, Thomas M., "Spenser and the Epithalamic Convention," *Comparative Literature*, 9 (1957).

Heninger, Jr., S. K., "The Renaissance Perversion of Pastoral," *Journal of the History of Ideas*, XXVIII (1961) pp. 254-261.

McGowan, Margaret M., "'As Through a Looking-glass,'" A. J.

Smith ed., *John Donne, Essays in Celebration*, Methuen & CO LTD., 1972, pp. 175-218.

Raizis, M. Byron, "The Epithalamion Tradition and John Donne," *Wichita State University Bulletin*, XLII, November, 1966, pp. 3-15.

4. その他

Abrams, M. H., and others eds., *The Norton Anthology of English Literature, Third Edition*, 1962, Vol. 1.

グリーン, J. R. 著, 中村祐吉訳『イギリス国民史』鹿島研究所出版会, 昭和43年。

Preminger, A. ed., *Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*, Enlarged Edition, 1974.

Smith, J. C., and E. DE. Selincourt eds., *Spenser, Poetical Works*, Oxford U. P., 1966.

Trevelyan, G. M., *England under the Stuarts*, Methuen & CO LTD., 1904, reprinted 1977.